

小樽高等商業学校と渡辺龍聖

倉 田 稔

目 次

はじめに

- 1 小樽高等商業学校の成立
- 2 渡辺龍聖校長
- 3 小林多喜二の高商入学のころ
- 4 教師たち
- 5 商品学
- 6 学生生活
- 7 筆禍事件
- 8 開校十年祭
- 9 渡辺校長の退任
- 10 伴校長
- 11 大西猪之介
- 12 当時の高商（伊藤 整 による）

はじめに

これは、小樽高等商業学校の、特に、初代校長渡辺龍聖の時代の記述である。それに、これは小林多喜二伝の一部でもあるので、彼が入学した年が、少し余計に描かれている。多喜二の伝記は、第1章前半を『人文研究』第86輯、第1章後半と第2章初めを、同第87輯、に載せた。それはなお続くはずである。本稿は、その伝記第2部の冒頭にあたる。つまり伝記(4)である。

1 小樽高等商業学校の成立

小樽高等商業学校の、その創立の歴史を語っておこう。

明治35年（1902年）に、東京にあった高等商業学校が東京高等商業学校と改称され、同年、神戸高等商業学校が設立され、明治37年（1904年）に、大阪市立高等商業学校が高商に昇格し、明治38年（1905年）には、山口高等商業学校および長崎高等商業学校が設立された。大阪のそれは国立でないので、次に設立される国立の高等商業学校は、いわゆる第五高等商業学校とされた。日露戦争（1904-05）後、政府は、国際貿易振興上、さらにもう一校新設の構想を持っていた。これを察知して、全国の有効都市が誘致運動を激しく始めた。それに、これら既存の4つの国立高商は東京より西にあった。そこで東京以北にも高商を設置しようという機運が盛り上がった。

明治30年、平田法制局長官が来樽した折り、商業会議所主催歓迎会の席上、主催者の1人、小町谷純が、北海道の外国貿易振興上、小樽に高等商業学校を設置する必要がある、と一席ぶった。これが第一声だった。¹⁾

小樽、当時は小樽区では、北の貿易港として、特に日清戦争では著しく発展し、明治32年（1899年）に、小樽区会常設委員会で、政府に高等商業学校設置の希望を述べていた。明治39年（1906年）に、文部省で高商増設が内定した。そこで高商誘致の運動が始まった。初めは函館が有力となった。仙台も名乗りをあげていた。

小樽区では、高商の敷地として1万坪、建設費のうち5万円を寄付すると区議会で決定し、樺区長と金子元三郎代議士により政府への働きかけがなされた。金子元三郎代議士を上京させて、猛運動を開始した。金子は、「小樽に高商を持って来るならば、学校の敷地はもとより、先生の官舎、学生の寄宿舎等を、全部地元で寄付する・・・」と政府に申し出た、と言う。²⁾

政府は、地元が建設費37万円のうち20万円を負担するならば、小樽に高商を

1) 『小町谷純先生の 小樽の思い出』

2) 大野純一「わが母校のルーツと将来への願い」(『緑丘』52号)

設置してもよいと返事をした。金子代議士から、椿秦一郎区長は電報で連絡を受けた。椿区長から渡辺兵四郎³⁾への手紙は、こうである。⁴⁾

ご使者をくださり、ご高情感謝。今朝出発のはずのところ、昨夜半、金子代議士より急電があり、文部次官より高等商業学校は敷地ほか五ヶ年賦で二十万円寄付できれば、設置の運びになるかもしれぬ。三日までに返事を要すると申して来ました。よって今日常設委員協議会を開き、ご相談する必要を認め、小生は今夕出発のことに変更しましたので、ご承知ください。

なお、お繰合わせできれば、なるべく委員会へご出席くだされたく、時刻は午前十時でございます。敬具

二日朝

渡辺様⁵⁾

椿

椿は、地元有力者である渡辺兵四郎、寺田省婦、小町谷純氏を緊急召集し、協議の結果、区会へ諮ったのではとても早々にはまとまるまいと懸念し、区会には事後に諮るという腹芸をやって、賛成の返電を打ち、その後、区会で可決された。敷地は8カ所候補があって、それぞれの地主が寄付の申し出をしたが、文部省係官が派遣され、敷地（当時は稲穂町、現在の緑町）が決定した。この土地は、木村円吉・金子元三郎・河原直孝・青木乙松・白鳥永作各氏の土地1万2千坪であった。

こうして明治40年（1907年）に、第五高等商業学校が小樽に設置されることが決定した。

当時小樽区の年間予算は、約30万円であり、20万円の負担は重すぎるので、北海道庁が5万円を集め、残りの15万円を小樽の資産家から寄付を募ろうとし

3) 渡辺兵四郎は、明治41年に衆議院議員となり、明治45年、第5代小樽区長に就任。

4) 原文は候文なので、現代語に翻訳する。

5) 越崎宗一『郷土史的自叙伝』昭和53年 37ページ

た。各町内に割り当てたが実現せず、結局、区債を発行して消化することになった。

明治41年（1908年）5月に、敷地（の整地）をし始め、校舎建築が始まり、同43年（1910年）2月に竣工し、同年3月、小樽高等商業学校の設置が公布された。翌44年（1911年）4月から授業が開始されることが公示された。尤も、後述するように、開始は5月であった。現在の小樽商科大学の前身校である。

この高商は、3年制で、1年が3学期に別れ、目的は「実業学校令及び専門学校令に依り商業上必要なる高等の教育を施す」ことであった。高商の学科内容は、他の高商でもそうであったが、東京高商を模範として定められ、実用英語、商業実践に重点が置かれた。入学者は、満17才以上の男子で、中学校や甲種商業学校を卒業した者、などである。

学校職員の定員は、校長1人、教授2人、助教授2人、書記2人とされ、開校時は、教授6名、助教授3名、書記3名となり、その後徐々に定員は増大するのであった。

さて初代校長には、東京高等師範学校教授渡辺龍聖が任じられた。渡辺は、2月に来樽したが、教師・設備が充分準備されていないので、予定の4月でなく、結局5月に開校した。小樽高商の教育方針は、つまり渡辺の教育方針は、商業学の原理を研究する学者を養成するのではなく、卒業してすぐ実務にあたり何等不便を感じない、いわゆる實際家を教養しよう、というものであった。⁶⁾

このころ、東大にも京大にも経済学部がなく、それらができたのは大正8年であったし、他の国立学校にも経済学部・商学部はなかった。

2 渡辺龍聖校長

小樽高商初代校長となった渡辺龍聖先生に触れておこう。

6) 『小樽商科大学史』財界評論新社 1976年

彼は、開校の年、明治44年（1911年）に校長となり、大正10年（1921年）1月に退任した。だから11年半勤めたのである。小林多喜二は、彼が退任した年に入学したので、校長の時代の最後の半年が重なっている。

渡辺は、慶応元年（1865年）生まれ、新潟県出身である。渡辺は、信州山奥のお寺の小僧であったが、檀家の人々に見込まれて、東京専門学校（早稲田大学の前身）に修行にやられ、明治20年（1887年）にその英文科を卒業し、アメリカに留学した。ヒルスデール大学からバチュラー・オブ・フィロソフィーをとり、コーネル大学から倫理学を専攻してドクトル・オブ・フィロソフィーの学位を得て、帰国した。彼は明治28年（1895年）、東京高等師範学校講師となり、ついで教授となる。明治32年（1897年）に高等師範から東京音楽学校が独立した。そして渡辺がその初代校長になった。明治35年（1902年）には、校長時代が終わり、清国総督袁世凱の教育顧問として招かれ、7年間その職にあり、同42年（1909年）に帰国した。

そしてすぐ文部省留学生として3年欧米に遊学することになり、ベルリン大学に学んだ。その途中、小樽高商の校長をやらないかという手紙を、彼は文部省から受け取った。彼の専門は商業学ではなく、倫理学であった。そこで、商業教育とはどれだけの意義があるのか研究してみようと考えて、フランス、ドイツ、オーストリア、ベルギーなどの商業教育を視察し研究し、その結果、商業教育が非常に重要な国家的任務を持つものであると確信したので、小樽への赴任を承知した。

彼は留学期間を切り上げて、同44年（1911年）1月3日に帰国した。そして2月、小樽に赴任したのである。彼は官僚的臭味をもたぬ教育家であった。それは彼の長いアメリカ留学のせいでもある。⁷⁾11年半の校長勤務の後、渡辺は小樽を去って、新設の名古屋高等商業学校校長として赴任することになる。

彼は当時の模様を述べた。「外観のみ完成された校舎が山腹に唯一つ立っているが、道は意外にも長く、二月と言うに流汗淋漓として拭ひもあえぬ。漸く

7) 中村の稿(『緑丘』13号) 11ページ

にして校舎に辿りつけば、休息すべく椅子一つ無く、全く山間の一軒屋よりもひどい。観れば校舎は不完全であり、床は持ちあがって、扉は開かず、黒板は勿論、肝腎の机がないのである、と言って誰に愚痴を言う術もない。」(筆者は点を2つ補った)

第1年は、150人の応募で72人をとった。ただし卒業時に50人となった。入学者は道内出身が4分の1であった。⁸⁾

渡辺校長の教育方針は、実務教育中心主義であった。ついで、単なる実務教育に終らせず、時代の要請にこたえる実業人の倫理を作ることであった。最後に実践を重んじた。

彼は、従来日本は、士農工商の時代であったが、現在は時勢が一変し、商は国家の存立上最も肝要な職業である、と考える。また、今までの商人の町人根性というような品性では、今日の社会の存立さえ危うくする恐れがある、今日の商人は、知識技能はもちろん、品格でも国民の上位を占めねばならない、そして学校では生徒を少年紳士として遇する、と言った。

学生であった越崎宗一は書く。渡辺は演説の際は常に「我輩は」を連発し、学生に対し「我輩は諸君を遇するに紳士をもってす」とおだてあげ、学生は「うちの親父」といった親近感を寄せていた。渡辺先生は実に人心をつかむことがうまく、その教育方針は、実務教育と実業人の人格養成とに力を入れられた。この方針は長く小樽高商・・・の伝統的特色をつくり出した。⁹⁾

校長は、学科編成のさいに実践科目を取り入れた。例えば、商業実践、企業実践、商品実験の科目であった。渡辺は、授業科目を設定し、全国から若い教師を呼んだ。はじめは学生のための寄宿舍もろくになかった。しかし、人的・制度的に序々に整備がなされた。渡辺は、スキーも取り入れた。彼は、激しい情熱で小樽高商に打ち込んだ。風采を飾らず、気やすく教職員・学生に接し、親身になって世話をした、と言われている。

渡辺は、教授陣の充実に努めた。まず教頭として、当時京都帝大の法学部助

8) 『小樽』86ページ

9) 越崎書 38ページ

教授伴房次郎をつれてきた。次に東京高商を卒業と同時の大西猪之介を連れてきた。東京外語から苫米地英俊を採用した。苫米地の専門は英語であったが、商業英語をやれと渡辺に命じられ、すぐその専門家になった。東京高商からは数名の教授に小樽高商の併任講師になってもらい、毎年出張講義があった。三浦新七教授は、はじめから併任講師でなく、小樽の教授も兼務していた。東大から、英語の八木、倫理の木村善太郎をとった。¹⁰⁾

越崎は書く。渡辺校長の最も大きな苦心は、中央から遠く離れた北辺の高商へ、いかにして優秀な教官を引っ張ってくるかにあった。しかし敏腕な校長の努力の甲斐あって、商業、経済、商品、外国語に優秀な人材を招くことが出来た。とくに英、独、米、仏、支から外人講師を招くことが出来たことは、国際貿易上の有意な実業人を養成するという高商の特色からいって、最も強みを加えた。¹¹⁾

特に外国人教員の獲得はむずかしかった。渡辺は、在外日本大使館や、在日外国公使館の大使や外交官に、人選を頼んだ。

各教授は一週間に数時間だけの授業で在宅の時間が多かったので、渡辺は各教授に著書を書くよう勧めた。一冊分の原稿がまとまると、渡辺はその原稿を雑誌『伝記』の主幹である東京神田の実弟に送るのだった。実弟はそれぞれの原稿にむいた、同文館、富山房、宝文館などに廻した。¹²⁾

中村賢二郎は言う。中村は、私立神戸関西学院の出身で、滞米10年、米国の大学の学位を2つ持つ。渡辺校長は、帰国して宮崎中学外国人代用教授となった中村を、高商教授として採用するという断行をした。初めから教授にすること、私立大出をそうすることは、珍しかった。小樽に着いた中村に、校長は自分の席からでてきて、満面笑みをたたえて手をさしのべ、握手を求めた。中村はエライナーと思った。こういう平民的態度は当時はしなかった。¹³⁾

10) 大野(『緑丘』52号)

11) 越崎書 38ページ

12) 神部の稿(『緑丘』73号, 1993年) 26ページ

13) 中村(『緑丘』13号) 11ページ

「渡辺校長は実務教育中心主義をうち出し、十周年記念式典でも商業実践、企業実践、商品実践の三つを他校にない独得の学科であるといわれた。しかし単なる実務教育ではなく、実業人の倫理養成とった方面に力点を置き、三年の在学中は帳簿やソロバン術¹⁴⁾をマスターすることではなく、商業の基本を教えるべきだとしていた。だから、商業学校には不用のようにみられる哲学もあり、最も重点をおた英語も実用商業英語より帝大英文科卒の文学士が多かった。」¹⁵⁾

渡辺は小樽高商の基礎を作り上げた。そして彼を中心として、教職員の努力、小樽の人々の協力によって、この学校は、順調に育っていった。¹⁶⁾ 渡辺は、今で言う単身赴任であった。伴は書く。教師に「退屈させまい、小樽の土地を厭とは思はせまい、此の二つは渡辺氏も随分苦心せられた。小樽を悪く言う事は氏の前では禁物である。渡辺校長の家族は氏の在任中満十年間一度も上京しなかったのも東京に憧れる様子を人に、見せまい為であった。¹⁷⁾

名古屋高商開校五周年の際の校長式辞で、渡辺は言った。「……本校に於ては、出来るだけ規則を制定しないという方針であります。……教育は個性の特異を尊重せねばならぬなぬものであるのに、共通の規則で束縛することは好ましからぬと思ひまして、出来るだけ規則を制定しない訳であります。」いかに彼が学園の自由を望んでいたかが察知できる。¹⁸⁾

3 小林多喜二の高商入学のころ

小林多喜二は、1921年（大正十年）3月に、北海道庁立小樽商業学校（庁

14) 当時の時代、しかしソロバンは必修だった。大正8年卒業生の言。

15) 越崎「小樽高商」(『北海道新聞』1964・3・11)

16) 緑丘五十年史』小樽商科大学 1961年

17) 伴の稿、『緑丘』83号、4ページ

18) 田中藤一郎(『緑丘』No.14) 2ページ

商)を卒業し、¹⁹⁾同年3月28日に高商の入学試験を受けた。庁商の2名以外にも、少しだが推薦入学もあった。受験の時、雪解けの悪路で、靴を泥にとられた人もいた。高商への坂の沿道は畑だった。小樽築港のあたりでも港いっぱい船が埋めつくしていた。小樽と札幌では、小樽の方が賑わい、人口も少し多かった。

大正8年には、6人に1人という合格率だった。大正9年つまり前年は、受験者3千余名で入学が180名だった、と言う人もいる。さて多喜二の時は、その受験者722名中、189名が入学を許可された。多喜二は、同年五月に小樽高商に入学した。それは第十一回生としての入学であった。宣誓式=入学式は、同年5月5日に行われた。この五月は、ちょうど学校の創立十周年であった。その式典はこの年十月に行われることになる。

小樽高商に入学することによって、ほとんど将来の生活は安定することが約束された。なぜならこの学校は、北海道でエリート校であって、卒業生は銀行・商社などで活躍し始めていたからである。

多喜二の一年後輩になる伊藤整は、小樽高商について面白いことを書いている。「小樽に二流の学校があった」と。実はある意味で、そうであった。学歴と修業年限で、3年の高商は、6年制の大学・帝国大学と較べて、三年短い。ただし、興味深いことに、北海道では北海道帝国大学は理科系であり、文科系の学校は小樽が代表していた。

また高商の図書館は当時、和書7100冊、洋書4100冊を蔵していた。立派な図書館だったとされる。閲覧室の一隅に内外の雑誌がいつも並べてあって、自由に読むことができた。当時の図書館長であった中村賢二郎先生の好みで文学書が多かったと、伊藤整が『若い詩人の肖像』で述べたが、大西猪之介のお蔭だという説が正しい。

小樽高商では、一年生は4クラスに分れた。その1クラスは商業学校卒業生のクラス(Dクラス)であった。他の3クラスは中学校出のそれである。

19) 現在の小樽商業高校。多喜二がこの学校を出たことを、在学・卒業生でも知らない人がかなりいるらしい。

多喜二が高商に入った頃は、映画では栗島すみ子が売り出しの最中であった。

この頃の小樽は、舗装されている道路が全然なくて、色内町あたりは、雨が降れば深い泥沼と化した。石川啄木が嘆き、高商の英語教師マッキンノンが、リヴァー・オヴ・マッド[泥の川]と名付けた状態である。ことに雪解けの頃、泥と馬ふんの混じった悪路は言語に絶し、それが乾くと風のまにまに舞い上がった。俗に言う馬ふん風である。こんな状況で、唯一の交通手段は夏は幌馬車、冬は馬そりであった。²⁰⁾寒い夜などは鈴の音が、街から街へ伝わった。

高商生が好んで行った肉屋は、米久、ときわ、であり、対北大[予科]戦で勝っても負けてもメートルをあげるの場所は、高橋ビアホールであった。²¹⁾これは公園通りの角にあって、高橋バーと云う人もいる。1杯15銭の生ビールを高商生はよく飲んだ。学生は、寿司では蛇の目寿司などによく行った。左文字書店があった。公園の上に桃太郎だんごが売られていた。水天宮の鳥居は大正9年5月22日にできた。社殿の前の高麗犬や燈籠も大正9年2月である。

高商石鱈が小樽の名物で、学校の誇りであった。高商では石鱈を作っていたのだ。

学生の中には相当の年輩者も交わり、すでに結婚している学生もあった。本州から来た学生は、いくつかの学生寮に入った。多喜二はもちろん地元小樽だから、寮には入らない。

学生の出席率は非常によかった。講義は謹聴し、質問もよくした。ちなみに質問をよく出す学生は優秀なことが多い。

当時の教官と学生（当時は「生徒」と言う場合が多かった）とは、あたかも親子のように、兄弟のように、親しみが深く、先生方の私宅をよく訪れて夕食の予定を狂わした無遠慮者も少なくはなかった。先生方のなかには、生徒と同じ年かあるいは生徒よりも年少の先生もおり、よく生徒と相撲をとったり、テニスをしたり、走りくらをした人もいた。²²⁾

20) 明治から大正末まで小樽に約40台の客馬車があった。冬にはソリとなり、馬ソリになった。大正9年に小樽でバスが走った。

21) 寿原(『緑丘五十年史』)

22) 相沢 同

高商のスローガンは、Captain of Industry（産業の総帥）であった。そう言われて、学生は自負心を持ち、勉強した。もっともこれは全国的なスローガンであった。高商を出ると、商社や銀行に入るのが本筋だと思われた。

小樽高商は、外国語に力を入れた。そこで小樽外国語学校と異名をとった。

一方、この学校では文学が盛んであった。その例として、俳句を挙げることができる。虚子の息子・高浜年尾（大正8年入学～13年卒）、蛇忽の弟・飯田武臣（大正13年卒）、比良暮雪（大正9年卒）などが有名である。特に多喜二が在学していた頃は、非常に盛んであった。

小野寺は書く。多喜二と伊藤整の学んだ当時の小樽高商は、俳句、短歌、文芸、洋画、音楽、映画、新聞、カトリック研究など、学生の文化活動が一斉に花を開いた。そして後に「学園のルネッサンス」時代と呼ばれた。

卒業論文のテーマも社会問題を扱ったものや、哲学的な傾向を持つものが多くなった。²³⁾多喜二らの在学時代には、革新思想が日本の思想界に激しく芽生えてきた時で、京都には河上肇、東京には福田徳三——ただし彼は、マルクス派ではない——、大山郁夫、佐野学教授などがいて、マルクス理論の研究が学内にもようやく盛んとなってきた時代であった。

高商の学内では、自由主義思想の研究が相当に盛んであった。²⁴⁾学園内の革新思想の指導的立場にあったのは、高松勤教授であった。高松は、商業学・商業実践を受持ち、大正8年（1919年）から昭和2年（1927年）まで在職していた。彼は後に高商を追われて、巢鴨高商へゆく。

この高商について、卒業生でもある伊藤整が書いている。それは彼の入学の頃、多喜二の入学の1年後である。——その学校は、落葉松に蔽われた山の中腹を切り崩して、かなり広い敷地を取って建てられてあった。校舎は薄い緑色に塗った木造の二階建てで、遠く海に面していた。校舎の主屋の中央は三階の塔になっていた。その真下の玄関を入った所のホールには、並行した二本の階段があって、それを登ると、更に二階から、三階の塔に登るラセン形の鉄製階

23) 小野寺「小林多喜二と伊藤整」（『緑丘』）

24) 西野（『緑丘五十年史』）

段が、半ば装飾の役をして、ハリガネ細工のように取り付けられてあった。・
 ・・玄関の左右に広がる主屋から後方の崖下まで延びた三つの棟は、階下が小
 教室や事務室になっていて、合併教室と呼ばれる大きな教室がそれぞれの棟の
 二階にあった。²⁵⁾

多喜二も、高商の地理的状况を書いている。高商は、「上がるに余程困難な
 坂によって距てられた山の中腹にあった。——その山というのは、市と他の町
 とを区切っている即ち一番町はずれの山であったのである。そして全く市の雑
 踏から離れた静けさは学校の住所として最も適した所であった。後はすぐ落葉
 松の林が覆っていて春になると林の中でなく鶯の調子のいゝ声が始終静かに勉
 強している教室へ流れてくるのであった。前はすぐ眼の下に市全体の屋根が
 ——それに続いてある時はキラ／＼とあるときは冷色になる海が一眼に見える
 のであった。市の中央から少し奥に引込んで運動場のある公園がそのこんもり
 した緑のしげりを見せている——雨のあとの緑などは素敵によかった。だんだ
 ん夏が近づくと運動会がよくこのグラウンドで開かれた。それで授業が終わると
 すぐ校庭へ出て遥か山から見下すのであった。」²⁶⁾

多喜二が小樽高商に入った大正10年（1921年）には、高商では次の行事が
 あった。

三月二八日 第一一回入学試験。(七二二名中一八九名が入学を許可された。)

五月 五日 新入生の宣誓式。

六月一日 修学旅行団, 釧路, 網走方面へ向かう。引率は中村・小尾教官。

六月一三日 浜林教官引率の修学旅行団, 室蘭, 洞爺湖方面に向かう。

九月二四日 開校十周年記念行事の一つとして区内中等学校庭球競技会を開
 催した。

九月二七日 臨時商業師範研究科を設置。

一〇月 六日から九日まで 開校十周年記念行事。

25) 伊藤整

26) 『小林多喜二全集』新日本出版 第6巻 519ページ

一一月二八日 渡辺校長，名古屋高商校長になる。後任，伴房次郎。

一二月一二日 渡辺前校長，名誉教授になる。

入学の時，坂道は雪が消えていた。坂の両側にある溝には雪解け水が勢いよく音を立てて流れていた。前方には緑色の校舎が春の陽光に照り映えて見えた。

新生の宣誓式は，入学式にあたる。これが図書館ホールで行われた。渡辺校長は，「知識技能はもちろんその品格の上においても，国民の上位を占むべき資格を備えざるべからず。知識徳望共に紳士中の紳士ならざるべからず。この故に本校生徒は少年紳士をもって遇するを主義とせるなり・・・」と説いた。²⁷⁾ 渡辺の言葉，「我輩は諸君を遇するに，青年紳士を以てする」という言葉が，この年も，多くの学生にとって感動的だった。

宣誓式が終わって，寮では歓迎会が行われた。ただし多喜二は寮に入らなかったから，それには出ていない。樽詰めビールを飲んだり，歓迎ストームがあった。

高商は，うす緑色の校舎だった。校舎は，冬には粉雪が吹き込むから，二重窓になっていて，中はスチームが通って暖かかった。夏は窓の外にカッコーの鳴き声も聞こえた。

高商の正門には小さな門柱があった。教室はリノリウムが敷き詰めてあって，美しかった。建物は必ず毎年ペンキでライトグリーンで塗り直した。学生は上草履に履き替えて教室に通った。合併教室が2つあった。

教室では成績順に着席していた。だがそうでない教室もあったようだ。また髪を伸ばしてはいけないことになっていた，という人もいる。だが上級生は髪を伸ばした。

多喜二と同じ年の卒業生，伊部は，八幡商業出なのでD組だった。彼は云う。

この教室がまた大変で，蒸気暖房がついていたが，配管設備が古くなっていたせいか，絶えずガタガタと物凄い音をたて，勉強の妨げになることおびただ

27) 小樽高等商業学校大正十三年卒業『五十周年記念文集』，徳橋 7ページ

しかった。蒸気暖房に初めてお目にかかった吾々は、暖房とはこういう騒々しいものだとの観念して、半月もたつと、騒音が耳につかなくなった、と。²⁸⁾ただし北海道での教室は暖房のため本州より暖かい。

新入生は、全国から集まり、南は九州・関西・関東・北陸・東北の各地方、遠くは満州、樺太からも来ていて多種多様²⁹⁾、それぞれのお国なまりで話し合い、昼の休憩時間は騒々しいくらいにぎやかであった。……そのうちに姓名、出身校、性格等がわかってきて、新しい友人もできるようになった。……同期のうちには25才³⁰⁾の人や、中には妻帯者もいた。その人たちは、学習生活の外に実社会の経験も豊富で、珍しい体験談を神聖なるべき教室においても披露した。³¹⁾

高商は自由な雰囲気であった。特に、丁度下にある庁商から来た学生は、それを感じた。庁商では、上級生・下級生の関係がやかましく、下級生が上級生に会うと必ずお辞儀をしなければならなかった。ただし少なくとも、初代黒沼校長の時代は、この関係が余りやかましくなかった、という証言もある。また庁商には天皇陛下の御眞影が校門のそばにあって、登下校には必ず帽子をとって深々とお礼をしなければならなかった。それをしないと、教練の先生などがどこからか見ていて、必ず叱られた。高商ではそういうことはなかった。だから高商の校門に入ると安んじる気持ちになったと、大津氏（庁商昭和14年卒業、高商昭和18年卒業）は言う。もちろんここで、庁商と言っているが、中等学校は全国的に共通しているはずである。

六月には、恒例の修学旅行があった。修学旅行は学生の楽しみの一つであった。開校三年目から三年生が海外旅行を試みた。その後ハルピンまで行くようになった。多喜二の学年、一年生は、浜林生之助先生が引率して、洞爺湖・室蘭への修学旅行を行なった。

28) 同文集。

29) 1年生193名のうち、北海道が59名にすぎなかった。『学校一覽』

30) 『学校一覽』

31) 小樽高等商業学校大正十三年卒業『五十周年記念文集』

4 教師たち

多喜二が第一学年の時つまり1921年（大正10年）の、5月に在任していた小樽高商の先生は、次の教官である。

渡 辺 龍 聖（校長）

西 尾 広（商業実践）

石 橋 哲 爾（清語）

寺 田 貞 次（商業地理）

井 浦 仙太郎（経済学・商業学，取引所論，兼任）

大 西 猪之介（後述）

中 村 和之雄（英語）

苔米地 英 俊（英語・商業英語）

小 原 亀太郎（商品実験）

伴 房次郎（法学通論1年・民法2年・商法3年）

三 浦 新 七（商業史，あるいは文明史。東京高商からの兼任。プラトンのイデア論などを論じた。講義は難しかった。）当時の学生は書く。三浦新七博士の文明史の出張講義 これ丈はどうにも頂けなかった。…我々に対する講義だから御自身では精一杯低い処迄降りて解説して居られるのであらうが、我々と先生では余りに距離が開き過ぎて居てどうにも付いてゆけない。或る若い教授に話した処「あの話が分かったら大変だ。あれは大西さんの授業同様，本当は君達に話すべきでなく，我々に話して貰うべき話なんだ。…」と云った。³²⁾

管 安右衛門（体育。大尉。日露戦争で鬼大尉の勇名をはせた）

高岡 熊雄（非常勤講師（以下，非と略）北大から来た講師で，立派な講義をした。学生は書く。大西先生と「全く対称的だったのは北大高岡熊雄博士の

32) 管野祐治（大正12年卒）『緑丘』56 16ページ

二週間にわたる殖民政策の講義だった。多分あれが大学教授の講義の見本とでも云ふのであろう。…何の変哲もない平易な内容を淡々とした口調で講じられてゆく、只それ丈の事に何とも云えない渋味があふれて居た。正に名人の至芸と云ふべき名講義であった。」³³⁾

ルイス・フーゴー・フランク (商品理化)³⁴⁾

根 来 簡 二 (非)

関 恩 福 (講師, 支那 (=中国) 語)

武 田 英 一 (簿記・商業学。財政学や倉庫論を教えた。大正12年, 東京商大専門部教授となる)

横 溝 直 哉 (講師)

高 島 佐 一 郎 (経済学)

T. ジョーンズ (英語)

橋 詰 益 哉 (法律学, 法学通論)

加 藤 政 秀 (体操, 嘱託)

ダニエル・ブルック・マッキンノン (英語)(別稿で扱う)

西 田 彰 三 (商品学, 商品理化, 企業実践)

大 平 頼 母 (英語。アメリカ帰り, 英会話。ニューヨークのコーネル大卒。大 正 7 年 5 月高商講師, 大正 9 年 6 月教授, 大正12年 7 月までいた。

その流暢な英会話は生徒のドギモを抜くに十分なものがあつた。

大 室 良 輔 (助手)

小 瀬 伊 俊 (商品学)

小 尾 範 治 (倫理学, 修身・ドイツ語)

伊 藤 伊 之 吉 (商業実践)

ト 部 岩 太 郎 (国語, 修身・国語漢文)

大 森 恵 吉

33) 同

34) (1886-1973)。参考, 保延誠編「The Centenary Book of Dr. Hugo Frank」(邦文・手稿) 1993年 5 月

手塚 寿郎（経済学，留学中，初の高商出）小樽高商在学中，英語の辞書を暗記し，覚えてしまった頁は，片っ端から食ってしまったという。一ツ橋専攻部へ行き，福田徳三門下となった。大正8年に小樽高商に着任した。小樽高商出の初めての教員である。風采を構わない，至って地味な人だった。数理経済学界の先駆者だった。大正9年在外研究で渡欧し，主にフランスで勉強し，大正15年に帰国した。したがって多喜二とは会っていない。高商アカデミズムの代表的人物であった。昭和6年に山内フミと結婚した。太平洋戦争たけなわの昭和17年，東亜同文書院大学に転出し，病気で帰省し，昭和18年5月，48才で死去した。ワルラス『純粹経済学要論』などの訳書がある。彼は近代経済学者であるが，教養の範囲が広く，また自由主義者であったといわれる。

高松 勤（商業学，商業実践。この人は注目に値する。高商の学生社会科学研究会を指導した。）

N.A. ネフスキー（ロシア語）（別稿で扱う）

村瀬 玄（簿記，商業実践。簿記・会計学の教授として，大正12年ころ外遊から帰った。「簿記は丁稚小僧の学問ではなく王侯の学問ですゾ」と，授業の初めに語った。

中村 賢二郎（英語，商業英語＝コレポン。アメリカ仕立ての洋服をピツタリ身につけた長身だった。あだ名はナカケンだった。一生独身だった。

大島 養市（助手）

浜林 生之助（英語。津師範から広島高師に学ぶ。福島中学に勤める。苫米地が浜林を小樽に呼んだ。とても英語ができるので有名であった。ある学生は書く。英語では浜林教授がトーマス・ハーディの短編物を講じて下さった…講師とテキストと完全にミートして一分のすきもない名講義であり，名舞台であった。

鈴木 為吉（非）

内田 権之助（助手）

目黒 三郎（フランス語）東京外国語学校卒

小林 象三 (英語) 小樽中学卒。大正9年から昭和25年まで勤めた。その後京都大学へ行く。

佐原 貴臣 (商業実践, 経済学, 商工経営)

椎名 幾三郎 (商業学, 商業実践) 藤本幸太郎の弟子。海上保険が専門。一橋専攻部卒で、「我が国の海運は、英米を除けば世界第1位」の名文句をはいた。スポーツ万能だった。

河合 逸治 (英語)

根岸 正一 (商業学, 会計学, 簿記, 企業実践)

ジョオ・アルベール・デーゲン (フランス語, ドイツ語, 雇)

松坂 将々 (非)

小幡 孫二 (数学, 商業算術)

大熊 信行 (経済学) 東京高商の卒業, 福田徳三門下であった。大正10年に高商に赴任し, まず原書購読をやった。ゼミナールで, マルクスの唯物史観を教えもした。放課後や夜, 自宅へ学生を集め, 得意のジョン・ラスキンやウィリアム・モリスの話, ドストエフスキーの小説論, 短歌の話などを和かに話したので, 学生には大熊ファンが多かった。(越崎) 大正10年4月に, 武田先生が学生に言った。「今度新しい先生が二人来られる。一人は福田博士の俊英で大熊君といい, もう一人は, 左右田門下の逸材で宮崎君という, 共に大西教授の後継者として恥じぬ立派な方である。この二人には原書購読をやって貰う予定だから君達はそのいずれを選ぶかを前以って決めておき給え」という紹介があった。大熊は, たまたま大西の急逝によりブランクになった経済史の講義を引き受けて, 中世から近世への経済史を講じることになった。学生は書く。正直いって名にし負う大西さんの後とあって, 講義がやりずらそうに見えた。彼は路上で相撲を始めて, ある下宿のお婆さんの目を丸くさせ, 「高商の先生でも相撲なんかとる事があるのか」と驚かせる茶目っけがあった。椎名と一橋が同期, 専攻部で椎名が1年先輩だった。³⁵⁾ (筆

35) 管野

者は、別稿でまた扱うつもりである。）

宮崎 力蔵 (非)。記録では (非常勤) とあるが、筆者は非常勤とは思えない。東京高商の左右田の弟子である。大正10年に小樽に来た。原書購読をまずキャナン³⁶⁾の「ウエルス」でやった。³⁷⁾

高商では、校長、助手、非常勤を除いて、40名も教師がおり、大変な陣容になっている。

7月以後採用されたのは、桜井 義祐 (非)、である。手塚寿郎は、大正9年から15年までフランス留学をしたので、在校中の多喜二とは面識はない。また以上の人々の中でまだ小樽に実際いなかった人もいるかもしれない。

文行寮舎監は中村和之雄だった。デモクラシーを強調し、間もなく生まれる子には、男子なら「改造」、女子であれば「デモ子」と命名すると言っていた。生徒は、もし女子が生まれて「でも子」となったらどうなるかと心配していたが、生まれたのは男子で、「改造」と命名された。

室谷賢次郎は、大正12年4月に赴任し、marketing そして経済史も担当した。「商業実践の仕事は初めは椎名先生が主管でしたが、後には、糸魚川先生³⁸⁾が担当され」た。³⁹⁾

5 商品学

小樽高商では創立当時から、商品実験といって、50名ほどの特殊の机を備えた教室があった。その机にはそれぞれガス・水道の栓がひいてあった。約50台の顕微鏡と十数台の天秤を備えた部屋もあった。商品学の時間にはそこで学生各自が色々の実験テストと行った。指導には日本人の他に、ドクター・フラン

36) イギリスの経済学者。スミス『国富論』のキャナン版を作ったことで有名。

37) 『緑丘五十年史』

38) 松商学園で学ぶ。高商では銀行論、銀行簿記を担当。キリスト教による自由主義者だったと言う。英国留学で洗礼を受けた。その後和歌山大学長。

39) 服部の稿、『南亮三郎先生追悼号』74ページ

クがいた。わざわざ商品学のためにドイツから招へいした。フランク先生の俸給は渡辺さんより高いという噂があった。実際は450円であった。⁴⁰⁾多分渡辺よりも高いだろう。

赤レンガの立派な商品館があった。そこには色々の商品の見本、世界の主な貿易国の本物の通貨が陳列してあった。

大正の中ごろには、石鹼工場を造り、これは商品学の実験工場で、そこで出来た商品は、「高商石鹼」といって、休暇中に学生が全道に売りに回った。そして学費の足しにする学生もいた。香りと品質が良かったので、当時はよく売れた。工場は今の高尚湯の左を上がった左側にあつて、教授や学生が実習で作った。(越崎)

高商石鹼は、公園通りで、中劇の前あたりで⁴¹⁾、高商生が、お祭りの時期に売った。他の屋台と並んで売った。評判はよかった。よく落ちるというものだった。洗濯石鹼であつて、洗顔石鹼ではなかった。生産と販売を高商生がやった。小樽の人たちがそこに買いにきた。

大野は渡辺に質問した。「うちは高商なのに何故物理学の講義や実験に力を入れるのですか」。

すると渡辺は、話した。「我輩が靴下を買うのために百貨店へ行ったとする、店員は一足一三銭、同一五銭、同一七銭の三種類のものを出して見せる。そこで、『この三種類の靴下はどう云う点に品質の相違があるのか』と質問しても満足に説明できる人には仲々逢えない。それではいけない。商人の使命は或品物を甲から乙なる人へ、又はA国からB国へ移転するだけではない。買手や輸入国に喜ばれるもの、ヨリ多くの満足を与えるものを、掘り出したり、作らせたりしなければならない。これも商人の重要な務めである。そのためには一応商品学を身につけていなければならない。」

またある時大野は聞いた。「石鹼工場は赤字ばかり出しているというのにまだ続けるのですか」。渡辺はそれに対して、「その赤字のよって来るところは

40) 当時一流サラリーマンが100円である。

41) 棟先生に聞く。

どこにあるかを、検討するのも貴重な会計学の問題である」と、笑いながら答えた。⁴²⁾

高商の教育の特色として、こう言えた。

- 1, 語学教育を重視した。外国人の先生が多く、英語で教えられた。北の外国語学校と異名をとるほどだった。
- 2, 科学教育を併せ行った。
- 3, 商業実践の科目があった。大きな教室全体が、銀行、倉庫、船会社、保険会社の店舗があり、各種証券の実習ができた。

高商卒業者は、英語、とくにコレポンに堪能であるという評判が高かった。

6 学生生活

高商は、本館校舎全体が、渡り廊下で商品館、また渡り廊下で図書館とつながっていた。階段付き渡り廊下で学生の登下校口を含む小室内運動場、そして正面側に守衛室（別棟）があった。

大正7年1月10日に、新築商品実験室ができた。翌年、暖房施設がつき、渡り廊下もできた。大正9年2月20日、企業実践科実習工場が落成した。のちの高商石鹼工場である。そしてこのころ、図書館書庫と新講堂教室が増設された。大正10年3月9日、新校長官舎1棟と職員宿舎6棟ができた。大正13年3月、判任官宿舎2棟が、そして多喜二卒業後、11月に柔剣道道場が落成した。⁴³⁾

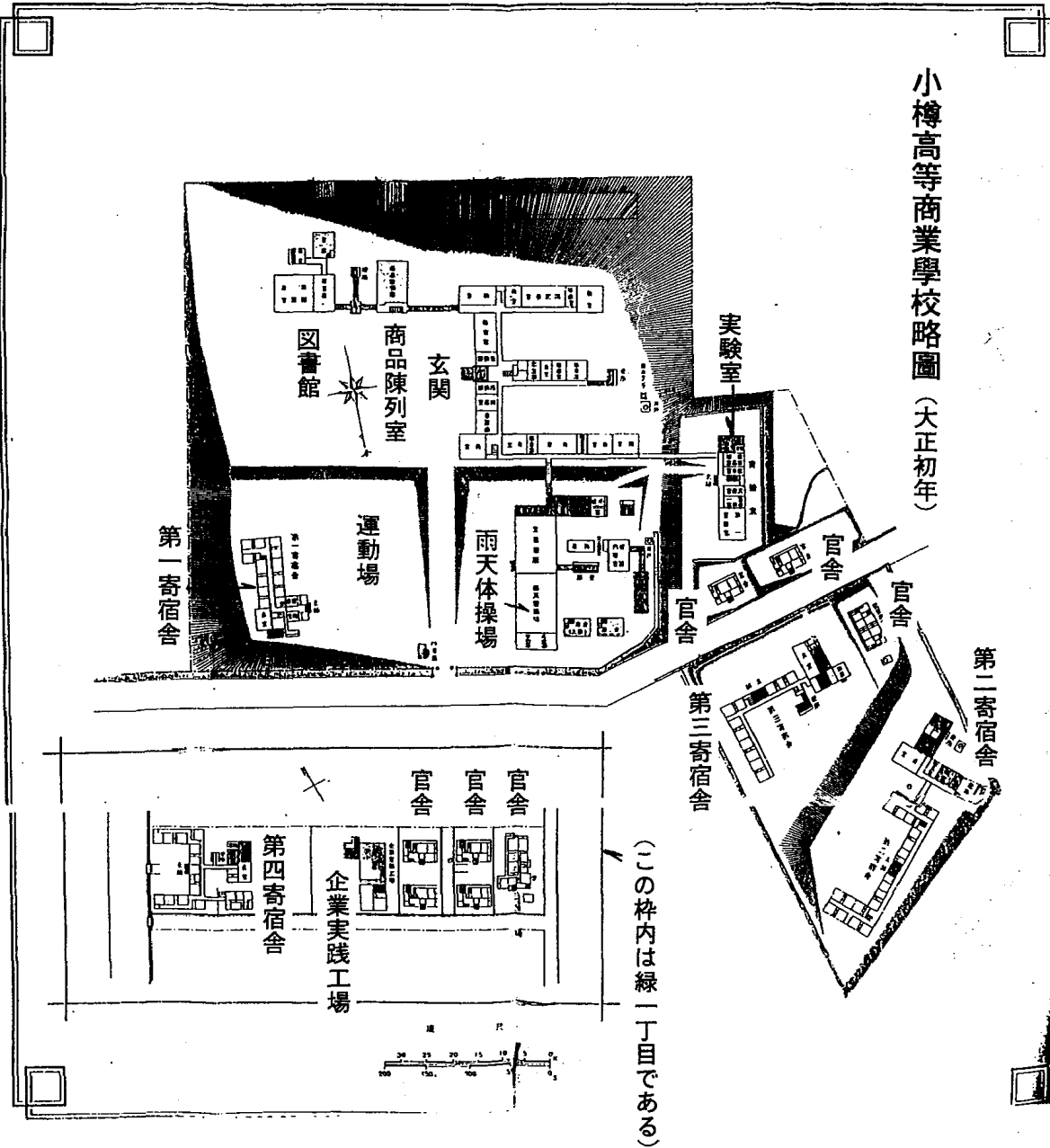
「玉の井クラブ」という職員生徒の集会所が地獄坂の中ほどに設けられ、和洋酒、喫茶、食事、娯楽の設備を整え、「脂粉なく」清浄さを保ちつつ、地獄坂の名所となった。大正元年12月7日に出来た。また「高商クラブ」が大正14年12月にできた。だが多喜二卒業後である。

高商には、第1寮＝北斗寮（大正2年12月1日開舎、135坪）、第2寮＝正気寮（大正4年1月25日開舎、154坪）、第三寮（正式名称）＝文行寮（またの名）

42) 大野、『緑丘』52

43) 大津博士氏の調べ。

(大正8年1月24日開舎, 91坪), 第四寮=玉の井寮 (大正5年11月4日開舎, 117坪) があった。それぞれ木造2階建てである。⁴⁴⁾それぞれ舎監がいて, 教師が担当していた。日本人教官宿舎は初めはなかったらしい。多喜二の入学の年にはこの4つは出来ていた。



44) 一部, 大津さんの調べを利用した。

例えば、第3寮には、5～60名であった。「朝は、味噌汁と納豆、昼はカレーライス類の一品、そして夜はさすがに少しばかり手を加えたものといっても葉書のように薄く聞いた豚肉の味噌漬といった按配になる。」⁴⁵⁾「けれどもなにしろ、なにもかもひっくるめて一カ月わずかに十三円程度の寮費」⁴⁶⁾だった。

「寮の運営の形式は、…それでも完全なる自治制のもとで行われていた」「それこそきわめて規律性の豊かな、それでいて格別に厳しすぎるという感じなど全くない、いかにもこれあるかなと思わせられる頗る立派な雰囲気のものであった。」⁴⁷⁾

寮は、1室8畳に3人が生活した。寮生活では友人ができた。4つの寮がそれぞれ違った雰囲気を持っていた。多喜二は寮生活をしていない。

高商では学生の「人数が少なかったから教授と学生、学生同士がよく知合い、親和感にみちていた。」⁴⁸⁾

柔道・テニス・野球など、北大との定期戦があった。スキー競技はまだ一般的ではなかった。例えば、野球部、庭球部は、年予算2～300円だった。大正10年秋、小樽花園グラウンドで、北大予科と高商の野球の定期戦があった。高商での恒例は、学園祭と外語劇、北大との庭球・野球の定期戦、応援団の対面式であった。

対北大庭球戦乱闘事件も起きた。小樽高商と北大予科との定期対抗戦は、前年度の敗者が敵方のグラウンドに出かける規約になっていたので、大正10年春の庭球試合に、高商側は、近辺で鐘や太鼓を借り集め、一列車借り切りで、源氏の赤旗を押し立てて、北大に遠征した。

高商の金岡・小泉組は、北大副将組まで総なめにして、応援団の大歓声の中で、敵方の大将組と決戦した。ジュース・アゲンを繰り返しているうち、ボールが「イン」か「アウト」かで、審判がもめ、結局北大側が棄権した。

45) 久城壽右衛門編『ある情熱の記録 手嶋恒二郎伝』保険研究所 昭和56年 52ページ

46) 同 52-53ページ

47) 同 53ページ

48) 徳橋（小樽高等商業学校大正十三年卒業『五十周年記念文集』）

高商側が「大勝」のムシロ旗を押し立てて、札幌駅に向かう途中、敵の応援団に襲われて乱闘となり、高商学生交野ほか、多数の負傷者を出した。⁴⁹⁾

7 筆禍事件

小樽高商生南亮三郎の「社会主義者を検挙する前に」の一文が、『小樽毎夕』に掲載され、これが問題になって、大正7年ころ、南が罰をくった。(越崎)いわゆる筆禍事件である。

南亮三郎は、京都府で、1896年に生まれ、京都市立第2商業から、大正5年に小樽高商へ入学した。

南の親友で、同じ下宿だった湯川は、書く。「大正7年の6、7月頃だったかと思いますが…大変な事になったのです」、小樽の新聞社に南が小論文を出した。その記事内容が筆禍に問われ、刑事問題となり、裁判にかけられたのである。南は小樽高商も一時退学となり、数カ月の裁判で、罰金40円となった。

「記事の内容は、当時米価が暴騰し、富山県の主婦達の反対運動が全国に拡大した事件に、関連したものであった…」⁵⁰⁾

湯川は、それが小樽新聞であったか、北海タイムスであったか、と記憶が定かではない。越崎は、小樽毎夕だと断言する。越崎の大正6、7年ころというのは間違いであろう。内容がこのように米騒動に関連しているとすれば、1918年(大正7年)なのだから、湯川のいう大正7年が正しいだろう。彼が高商3年生の時の事件であった。

南自身はこう書く。三年のときの卒論は[大西]先生から指導を受けた。私の選んだ題目は「社会主義研究」というとてつもない奴で、先生から Bernstein⁵¹⁾を借りて読み出した。そのとき先生は私に、「君、社会主義をやるのもよい

49) 野介, 同文集。

50) 湯川励「南君と私」(『南亮三郎先生追悼集 わが人生は“人口”の学に明け暮れて』雄松堂出版 1986年), 45ページ

51) エドゥアルト・ベルンシュタイン(1850-1932), 修正派マルクス主義者。

が、一生涯、めしが食えなくなるのを覚悟してかかり給え」といわれた。まったく世の中は、そんな時代であった。

Bernstein をやっていた大正七年に「米騒動」がおこり、日本の社会は大きな動揺を経験した。その張本人として続々検挙されだしたのは「社会主義者」であった。多感な青春がこの暴挙に義憤を感じたのは自然で、私は一文を草して地方新聞に投じた。「社会主義者を検挙する前に」というのが、その新聞に掲げられた一文の題名であった。

この一文は破門をおこした。いわゆる筆禍事件で、地方裁判所で起訴された。「めしが食えなくなる」という大西先生の警告が早くも適中したのである。卒論も、講義 [=受講] も、もうおしまいであった。……

三年が終わってから私は「実践助手」とかいう名儀で学校に残った。当時の校長さんたちの特別な計らいにちがいがなかったが、……」⁵²⁾

渡辺校長は、南の将来を惜しみ、彼は復学となり、一年遅れて大正9年に卒業した。南はその後、小樽高商教授になるのだった。

8 開校十年祭

この年の5月に、小樽高等商業学校が開校して10年となった。この1921年の10月に十年祭が行われることになった。

一〇月一日には記念講演会が催された。七日は、図書館を会場に式典（記念式）を行い、校内が公開された。正午に立食の宴があった。午後からは剣道・柔道・相撲・庭球・弓術の各部の大会が開かれた。八日には、小樽公園＝花園公園に大アーチを作り、競技大会が行われ、ちょうちん行列、職員および生徒祝賀会が行われた。九日は、野球大会（小樽公園）、企業実践工場の公開、同窓会大会、懇親会、そして職員表彰がなされた。

記念行事はこれ以外に、あるいは同じかも知れないが、次のようなものが

52) 『緑丘』65, 大西猪之介教授特集号, 11ページ

あった。展覧会、外語劇大会、花園公園での陸上競技大会であった。それまで運動会は、学生が夢中になって勉強を怠るという理由もあって、禁止されていたのであった。その名称が陸上競技会とされ、記念行事だからという理由で特に許可された。運動会には教授や外人教師も喜々として色々のゲームに参加した。上記の野球大会は、この陸上競技大会の一部であろう。また校庭にかがり火を炊いて四斗樽の鏡を抜いて、教職員一同、夜の更けるのを忘れて飲を尽くした。⁵³⁾

十周年記念式典で、渡辺校長は回顧している。

彼は小樽高商の校長を引き受けるにあたって、広い視野から日本の高等専門の商業教育のあり方を再検討し、その上で手を染めようとした。そのため、教育的見地から、世界の最もすぐれたこの種の大学をつぶさに視察し、その長所を小樽高商に導入して、独特の学校経営をした。

そのための第一は、実業教育の軽視という社会風潮を是正するため、高度の産業人育成を考えた。つまり、日本が国際的に大飛躍をするため不可欠な、語学を身につけさせること、また、国際貿易に熟達する知識技能と、道義的責任感の培養を、カリキュラムの上で配慮した。語学教授陣を豊富にし、多くの外人教師を招いた。取り扱う商品の科学技術を理解するために、商品学、商品理化を取り入れた。諸学科の総まとめとして、商業実践、企業実践のために石鹼工場を作った、などなどである。

また「我輩はわが緑丘学園には日本一の教官を採用している」と自負した。

⁵⁴⁾ たしかに彼は、優秀な新進気鋭の教授陣を集めた。⁵⁵⁾ 教官を採用する際には、首席採用主義のようであった。⁵⁶⁾

だが実はこのころ、渡辺校長の退任の話が出ていた。留任運動をやった学生もいた。そのため十周年記念は、華やかなうちにも、教職員・学生は沈んだ気持ちでもあった。十周年記念祭は、いわば渡辺校長にたいするはなむけでも

53) 相沢「思い出を辿って」(『緑丘五十年史』161ページ)

54) 関, 同

55) 苦米地『緑丘五十年史』

56) 木村, 同

あった。

9 渡辺校長の退任

11月11日、図書館で渡辺の送別会（離別式）が行われた。渡辺は、伊藤整によれば傑物、苫米地によれば名校長で、高い人格とすぐれた識見を持っていた、と言われる。渡辺は、倫理学者として日本有数であった。その上、政治手腕が卓越していた。それに高商の校長は権力があつた。授業科目の設定、誰に何を担当させるか、人事権つまり誰を採用するか、ボーナスをどれだけ与えるか、海外留学を誰にさせるか、などである。現在では考えられないほど権力があつた。

渡辺は、「我輩は諸君を遇するに、青年紳士を以てする」と学生に言った。

彼は、商業立国によって農業工業を一層盛んにしようとした。商業こそは農業工業の上位にたち、かつ農業工業を指導し刺激すべきものだ、という信念があつた。⁵⁷⁾

渡辺は、高商在任中に、名古屋高商創立委員長となつた。そこで校長が退任するという噂がたつた。しかし彼は、「我輩が名古屋高商創設の委員長をしているのは、小樽から教官を引き抜かれぬようにするためであり、断じて動くことはない」と、答えていた。だが実際は、名古屋高商に転出することになつた。それに教師を小樽から名古屋に引き抜いたのだった。

渡辺は、退任の式当日の話で言った。「老齡、地獄坂登るに堪えず」、だが次の校長伴先生の人格、識見を讃え、「安心して本校を離れることが出来る」。あるいは、「老齡地獄坂を登るに堪えず、二代校長として、人格識見共に優れた、伴先生が二代校長になるので」と訓辞を残していった。ついでに、「今こそ伴先生のお頭が薄い、十年前、京都帝大から本校へ着任された頃は漆黒の髪であつた。」と笑わせながら言った。離別式で彼は、「小樽高商の基礎は十分でき

57) 富樫、『緑丘五十年史』

あがった。後事は優秀な伴君により益々発展の一路を辿ることを信じ後顧の憂いなく去ることができる。」と語った。またこうも言っている。「十年間、心尽くして育てたり、行末長く吾子に幸あれ」。この歌を伴に見せた。

告別の辞と、伴房次郎新校長の就任の挨拶が、在校生一同に対して行われ、その後、学生越崎宗一が両先生に歓送迎の言葉を述べた。(ただし筆者は原文に点を加えた。)

私達は、渡辺校長が名古屋高商創立委員長に選ばれた際、私達は、胸に何となくある不安を感じたのでありました。それ以来われわれ学生は、ある黒い雲に脅かされてきました。しかしその中にも私達は、あるいは校長の決心意見をきき、あるいは樂觀すべき消息を聞き伝え、わずかに慰めて参りました。しかし私達が胸に怖る怖る抱いていた不安は、到々やってきました。いよいよ校長先生とここにお別れしなければならなくなりました。かねて内心覚悟はしていても、それが実現してこの席で送別の会を催すに当って、全く感慨無量の念にうたれるのであります。今日の日は、私達にとって永久に記念すべき実に悲しい日でなければなりません。

先に渡辺校長は、明治四十三年未だ内地の人々からは異国である、熊やアイヌの住んでいると思われていたこの北海道に、わが小樽高商校長として渡道せられ、位置において甚だ不利な本校をして、遂に今日をなすに至らしめて下さいました。今日われわれは、小樽高商の学生である、小樽高商卒業生であると威張ってられるのも、一に渡辺校長のお蔭であります。今日どこの高商に対しても決して見劣りのしない学校に仕立て上げて下さったのも、校長のお蔭です。われわれ全校の学生は、ここに満腔の感謝を捧げなければなりません。いまや渡辺校長は先生の言によれば、一に公、二に私の都合上、名古屋に去られようとしておられます。私共は、校長が本校のためにお尽くし下さった功績が大きければ大きい程、校長を手放したくはありません。しかし私どもは校長を無理にお留めしようとは致しません。私は過去の御尽力に感謝して潔くお送りしようと思います。私共は不満もあり、渡辺校長の前にいいたいことも胸に余るほど沢山あります。しかし私はいまこの際、特にいいたくもありません。

またいうべき時期ではないと思います。ただ校長は、今後本校のために尽力すると言明せられました。私は願くば、このお言葉が一片の空言でなくして真実に心の底から溢れ出た愛のほとばしりと信じます。諸君潔くお送りしようではありませんか。

私達は、この悲しみの中にも伴校長を迎えて喜ばねばなりません。伴新校長は京都の大学より遙々この遠い北海道へ赴任せられ、十年この方、渡辺前校長を助けられ、その内助の功また大であります。伴先生は、本校の新校長としてその人格においても学識においても、また本校の事情をよく知っておられる点においても、最も適任者であります。伴先生は謙遜せられて、私は学校の一時の預り番である、留守番であるといわれましたが、先生は決してそんな方ではありません。今後の本校をしてますますその基礎を固め、発展せしむるに足る最適任者であると思います。かかるよい校長を迎えて、われわれはせめてもの慰めと致したいと思います。

これをもって両先生への送迎の辞といたします。⁵⁸⁾

渡辺が一筋縄ではいかない人だという例は、まだある。

商業大学設置の議論が明治30年代から出されていた。東京高商が運動を進めていた。大正7年12月に大学令が制定されて、単科大学が認められるようになった。小樽高商でも、留学帰りの大西教授など若手教官が大学昇格を提唱した。大正10年の卒業生は111名だったが、彼らには、昇格運動をやったという人もいる。これが全校生徒その他の運動にもなった。大正8年2月6日に「卒業生在校生昇格期成大会」が開催された。宣言でこう言う。「吾人は大正九年四月一日を以て本校の単科大学に昇格するの目的を達せんことを期す。」しかし結局これは実現されなくなった。

大正8年には、東京高商が東京商科大学になり、神戸高商が神戸商大になったが、これで全国の官公立専門学校は一斉に大学昇格運動を起こした。大正9

58) 越崎書 48-50ページ。ただし、演説草稿である。

年3月に、東京商科大学が設置された。当時渡辺校長も、「もし本校を差し置いて他校が大学にな」ったら大反対する、と言っていた。それなのに、この離別式で彼はこう論じたのである。

「近年各地の専門学校を大学にする運動があるが、大学と専門学校とは使命が違う、したがって断じてこれに同ぜず」。これを聞いて、一同は啞然としたのである。⁵⁹⁾

渡辺は、大学と専門学校について本来深い考えがあったので、大正15年11月4日、名古屋高商創立5周年で、こう述べたこともある。

「我が邦の教育制度は、高等教育機関として、大学と専門学校とが存するのであります。大学は学理及び応用を攻究し、専門学校は学術、技能を教授する所で、共に国家最高学府であります。大学は理論を主として応用に及び、専門学校は實際を主として理論に及ぶのであります。その間何等徑庭のあるべきはずはありません。両者相まって、国家最高教育を完うする次第であります。

大学と専門学校とは、職能を異にしておって、甲乙を是非すべきものではない。故に専門学校が大学の看板に塗り替えをするということは、昇格にあらずして、変格である。

然るに、文部省当局自身が昇格などという言葉を使用するから、右様の騒動が起きたのである。それは、文部省当局自身が、大学は高級で、専門学校は定休のものである、大学は学生というべし、専門学校は生徒というべし、大学卒業業者には肩書を認めるが、専門学校にはその必要を認めない。政府の差別待遇は社会に反映するから、社会もまた、差別待遇をする。これが、今日の昇格運動を惹起した所以である。」⁶⁰⁾

また渡辺は、自分だけ小樽高商から出ていったのではない。国松（会計学）、高島（金融経済）、小原（商品学）、石橋（中国語）の4教師を、自分と一緒に連れて、転出した。これは高商に大きなショックを与えた。⁶¹⁾

59) 相沢、『緑丘五十年史』

60) 田中、『緑丘』14号 2-3ページ

61) 渡辺は、三重県桑名へ疎開し、そこでなくなった。墓所は名古屋の八事の興正寺にある。

10 伴校長

第2代校長に予定された伴房次郎は、四高出身で、京都出身である。明治35年に東京帝国大学法科大学法律学科を卒業し、同年、京都帝国大学法科大学講師となり、翌36年に助教授となり、明治41年にイギリス、フランス、ドイツに留学し、同45年に帰国し、小樽高商教授に就任した。

新校長伴房次郎は、篤学温厚、よく人を用いたので学風は安定し、母校愛が強まり、同窓の友愛がわきあがった。⁶²⁾また伴は、強い発言力をもち、誰しも一目おいていた。そして彼は「学園のルネッサンス」と呼ばれる時代を築いたのである。彼は「滋父」のようだった。⁶³⁾

教師としてのかれについて、ある学生は書く。伴さんは只単に人格者に止どまらず、すばらしい法律学者なのだそうだが、……只皆が一心に法律を勉強したのは、試験の成績が悪いと伴さんが心から残念がられる。それを見るのが嫌で、別に法律は面白くはないが、伴さんの為に、伴さんを喜ばせる為にせつせと勉強したのである。

学生・手嶋も伴について書く。「第二代の校長もまたいかにも温和な顔に人間味あふれる個性を持たれたひとであった。」⁶⁴⁾

ついで2人の校長についても言う。「あの校長達の建学の精神というものは決してただ学問をすることだけをよしとしたものではなかった」「むろん、学問の大事さを説いたことはその通りであった。けれどもあの校長達はそれ以上に学校というものを、先ず社会機構のなかの一部であるという把え方をしている。」⁶⁵⁾伴については、別稿で再論する。

小樽高商の先生は、多喜二が1年生の時、つまり1921年5月から翌年3月

62) 苫米地、『緑丘五十年史』

63) 板垣与一

64) 久城壽右衛門編『ある情熱の記録 手嶋恒三郎伝』

65) 同

までの間、次の人が去っていった。

渡辺龍聖(校長, 名古屋高商へ), 石橋哲爾(名古屋高商へ), 大西猪之介(病死), 小原亀太郎(名古屋高商へ), 横溝直哉, 高島佐一郎(名古屋高商へ), T. ジョーンズ, N. A. ニェフスキー(大阪外語へ)。

同じく多喜二が1年生の時、次の人が新しく赴任した。

桜井義祐(非常勤, 体操・剣道), 原岡 武(支那語), A. B. ラウンツ(英語, 商業英語), C. N. スミルニツキー(ロシア語)⁶⁶⁾

小樽で当時最も有名な教師の1人, 大西だけを, 素描しよう。

11 大西猪之介

大西猪之介は、明治21年京都に生まれた。京都市立商業を出て⁶⁷⁾、明治38年、神戸高商に入り、津村秀松博士の弟子となった。この師に大層可愛がられた。雄弁の人だった。明治42年9月に東京高商専攻部に入学した。当時経済学界の最高峰といわれた同校の福田徳三博士⁶⁸⁾の高弟と言われた、という説があるが、そうではなく関一の弟子である。そして左右田喜一郎にも教わった。明治44年7月、卒業とともに小樽高商に赴任した。渡辺校長が招へいしたのである。

渡辺は言う。「……小樽高商創立の当時余は、学校が僻遠の地にあるため特に人材を容れて大いに校名を宣揚する必要を感じ、経済学の方でいろいろ人物を物色したのであるが、相当の人で北海道まで出かけてくる勇者はなかなか見つからなかったのである。それでも余は種のよい雛から育てあげるに如かずと思いつき、当時の東京高商専攻部在學生の中に之を物色して遂に大西君に白羽の矢を立てたのである。専攻部の方からも……神戸高商の方からも稀に見る逸

66) 『緑丘五十年史』から

67) 『大西教授の思い出』北方日本社 1925年

68) 東京商科大学教授。『全集』あり。弟子に、大塚金之助, 中山伊知郎, 手塚寿郎など、一方で慶応の、小泉信三, 高橋誠一郎がいる。労農党を支援したこともあり、並の学者ではない。

材だとの折紙を貰ったので、余は辞を厚うして君が小樽のために一肌ぬぐべきを乞うたのである。君はそれを快く諾してくれ卒業と同時に小樽に出て来たのであった。」渡辺は、その際、外国留学を約束した。その約束通り、大西は大正2年に海外留学をした。4年半遊学をし、ドイツ、ストラスブール、イギリス等を回って、帰国した。

小樽高商では彼はその一枚看板とされた。彼は高商のプライドであった。渡辺は言う。「4年半遊学の後小樽の講壇に立った君は、外に対しては学校の名声を、内にあっては学生の声望を一身に負うたかの観があり、大西君あって小樽は輝いたようなものである。」⁶⁹⁾

大西は、経済学・財政学を受け持った。授業では古典経済学をも講義した。当時の高商は大西の独り舞台だった。彼は早口で講義をした。

「大西教授は、手も八丁、口も八丁で、象牙の塔にのみ立籠ることなく、当時、街の進歩的思想団体たる、啓明会主催の講演会などによく出られた。」

ある学生は書く。「大西の授業には全く我々悲鳴をあげた。人の三倍の早口であの独白の講義を五十分続けられては……あれは全く殺人的講義で、凄いと云ふ以外評しようのな講義だった。

大西は、……たとえばマルクスにしてもあの痛烈な論法で散々に、完膚なき迄に論破して仕舞ふ。次に彼の生きた当時の時代精神を顧みる。斯くの如き時代精神をバックとして生きる以上彼の如き誤りを犯すのも亦無理はない。かくて次章に移ると云ふ授業のやり方であった。……如何なる欠陥も見逃さない。只それを責める丈ではなく、どうして斯様な欠陥が生まれたかを追求する。かくして『総べてを理解する事によって総べてを許す』大乘的見地に立つのである。

……またそれ丈に福田徳三博士のような単純で直情径行の人はどうも大西先生の考え方に同調しかねるようであった。『私はどうもあの一見如何にも歯切れが好きそうで、其の実極めて歯切れの悪い、大西教授の物の云ひ方観方は嫌

69) 鎌倉「幻の先生大西猪之介教授」(『緑丘』59号) 36ページ

ひだ』と公言された事がある。……

〔大西は〕只単なる経済学の先生ではなく人生哲学の天才指導者であり、偉大なる教師であった。」⁷⁰⁾

だがその大西が大正10年末病気となった。医者は誤診し、実際は腸チフスであった。そして大正11年2月8日、急逝した。34才の若さだった。

これは学生にとって大いなる精神的打撃であった。大西先生に教わりたくて小樽高商に来たという学生が少なからずいた。小樽高商で当時、一番人気があったのが大西教授であった。学生たちはがっかりした。

大正12年卒の学生玉井は書く。「大西猪之介先生が急逝されたという知らせは、晴天霹靂のように学校内外に伝わった。それは私たちが2年目の冬のことであった。大熊・宮崎の両講師が赴任されたばかりの頃で、学校の中に大きな穴があいたような感じで、学生は何と表現してよいかわからない一種の虚脱感に襲われていた。」

大西は、学生時代に『帝国主義論』を上梓し、『囚われたる経済学』を大正9年に、出した。そして『伊太利亜の旅』を大正8年に著し、人気の最高潮にあった。その中の

君知るやレモンの咲く国、オレンジは緑濃き葉に照り映ゆる国の美文は有名であった。彼は、町で開かれる文化講演会にも出て、市民に人気があり、いつも満員であった。

彼の学風は、イギリス古典経済学派とドイツ歴史学派経済学の紹介であり、哲学や芸術にも理解を示した。学問の幅が広がった、しかし深くはなかった。彼の死は小樽で深く惜しまれた。

大西は、2年生と3年生の経済原論を講義しており、また、経済史、外国貿易政策（教科目では商業政策）、さらに原書講読であった。多喜二は大西教授に直接教わっていない。少なくとも授業には出ていない。大西の亡くなった時、多喜二はまだ1年生であったからである。

70) 管野祐治（大正12年卒）『緑丘』56号 16ページ

教授の他の作品として、『放たれた経済学』などがあり、その後、南・高島によって『大西猪之介全集』が編まれた。東京の一部の学者は前書を“ハナ（鼻汁）垂れた経済学”と言った。

さて、小樽高商の図書館が、商業学校にしては珍しく多くの文学書や芸術書を備えていたのは、大西の提言によると言われる。そこには西欧近代の文学作品の原書や翻訳、また当時の日本の作家たちの小説がほとんど揃っていた。

大西は小樽に影響を与え、また大西は小樽で作られもした。彼は学生をインスパイアー（鼓舞）した。⁷¹⁾

多喜二は大西教授について、後に、少し批判的な発言をしている。『囚われたる経済学』のことを、「あれはなっていない」と、親友島田に語っている。多分、高商卒業後のことであろう。この頃は多喜二はマルクス学を学び始めていたので、そのような発言が出来るし、当然そうするであろう。

12 当時の高商（伊藤 整 による）

大正十年の情勢はどうだったか。

11月に原敬首相が東京駅頭で暗殺された。同月、皇太子裕仁が摂政になった。父大正天皇が病弱であったからである。こうして皇太子、後の昭和天皇は若い時から政治に携わる。

12月にワシントン会議が開かれる。これは第1次大戦後の連合国の国際軍縮会議であった。これで日本も少し軍縮をせざるをえなくなり、これが数年後になって、小樽高商軍教事件の遠因の1つになる。

多喜二が学んだ当時の小樽高商を、伊藤整の描写を利用して、見てみよう。ただし整は、多喜二より一年後、1922年の入学である。

——高商は開設後まだ十年ぐらいにしかなっていなかったが、生徒の気質が素直で、都会ずれしていないためか、就職率は良い方であった。だからここ

71) 『緑丘』1969年 N0.64・65 (実は65) 大西猪之介教授特集号

を卒業した青年たちは、安全な勤め人の生活を半ば保証されたようなものであった。⁷²⁾

高商の生徒の半数は北海道内から、半数は「内地」の各県から来ていた。その理由の一つは、「内地」から来た生徒たちが、「北海道」という北方の異郷に行くというロマンチズムを心に持っていたからであった。そういう生徒の一人が高浜年尾⁷³⁾であった。小林多喜二などのように、この土地で育った人間は、「内地」からはるばるこの北方の学校にやって来た級友に親愛の情を抱いた。

若い経済学関係の教師たちは、かれらの多くが一橋⁷⁴⁾で学んだ福田徳三の学風のほかに、流入しつつあったマルクス主義経済学を背景としての河上肇⁷⁵⁾、櫛田民蔵⁷⁶⁾などの学問の影響のもとにあった。そしてその時代は、労働運動の高まっていった大正末年であった。⁷⁷⁾学生一般に左翼風潮が盛んであって、経済学系統の教師にもそういう色彩の人がいた。またマルクス主義に反対の教師でも、特にその反対の根拠を説明しなければ公明でないように思われていた時代であった。⁷⁸⁾

文学的な、または社会思想的な一種の激しい雰囲気、その頃この学校にあった。この教師たちは、みな若く、当時の自由主義的な雰囲気の中で、一種の潑刺とした校風を作っていた。そこの教育は、全体として、商業実習的であるよりも、かなり社会思想研究的であり、かつ文学的と言っていいほど語学偏重主義であった。当時その学校の図書館は、立派な蔵書を持っていた。経済学関係のものはともかく、近代欧州の文学的な諸作品の原書や翻訳から大正期の新しい文学書、谷崎、芥川、室生、菊池、葛西等の小説類がほとんど揃って

72) 伊藤『若い詩人の肖像』

73) 高浜虚子の息子。

74) 東京高商のこと。

75) (1879~1946)。拙稿(『人文研究 87』)で扱った。

76) 櫛田(くしだ たみぞう, 1885~1934)。マルクス経済学者

77) 『伊藤整全集』 第二四巻 新潮社

78) 同 全集 第二三巻 102ページ

たことも、校風の反映であったのだろう。何か盛り上がるような気分が教員と生徒との間にあった。学校が設立されてから十年ぐらいで、優秀な若手教員がちょうど揃った時であった。

そして私 [=伊藤整] たち生徒が影響を受けたのは、商品実験とか簿記とかの実務教員でなく、これらの経済学や語学の文科系統の教員からであった。

実習を軽蔑していた多喜二や片岡亮一や、佐々木妙二、山内賢、池隆治、私 [伊藤] などの文学青年にとっても、学校は、語学としての文学と新しい社会思想の基礎としての経済学を学ぶ所として、ある新鮮な、若々しい意識を満足させるものを持っていた。多喜二が多喜二のようになったことについて、私 [伊藤] は、あの学校のあの空気の中で、文学特に小説家を志した一生徒の当然行くべき道を行ったものとして、言わば極く自然のことに考えられるのである。⁷⁹⁾——

79) 伊藤整「小林多喜二」(同、第二〇卷)

(本稿は、高商史研究会の活動の一つの結果である。)